HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	北海学園大学人文学会第２回記念シンポジウム記録 人文学の新しい可能性(2) ： 安酸敏眞『人文学概論』を読む
著者	本城，誠二; HONJO，Seiji
引用	北海学園大学人文論集(59)：53-52
発行日	2015-08-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

全体討議

質問・質疑応答

○司会（本城）　今回それぞれの分野から４名の先生の発表は，結果として，人文学の歴史や歴史資料・テクストの解釈・文化の翻訳・横断と影響などについて，バランスよく俎上に載せていただいたような気がいたします。ただシンポジウムが，複数の発表者による共通のテーマの一方的な報告に終わらないために，全体討議の時間を設けましたので，質問に対して順番に回答をお願いします。

○大谷　いただいたご質問は，中国における近代化に中国的な教養概念がどうかかわったか，何か考えるヒントがあれば教えていただきたいということでした。「近代化」をどのようにとらえるべきかは，かなりむずかしい問題です。不幸にして，私たちアジアは自律的に近代を切り拓いたのではなく，西洋によって門を押し開けられた，すなわち「近代化イコール西洋化」という図式に取り込まれてしまいました。その際，中国は堅固な自己の教養があるために，外から来た理論を抵抗なく受け入れて，器用に自分自身を変化させてしまうような芸当ができません。そこで，たいへんな苦闘を経験することになりました。

そのひとつの反応に，洋務運動の核となった中体西用論があります。「鉄艦・大砲」の圧倒的な軍事力を前にして，本質の「中国」は維持し，作用の部分だけに「西洋」を接ぎ木しようという理論です。しかし当然ながら，付け焼き刃がおいそれと身につくものではないという認識は，進歩派，守旧派の双方に堅固にあり，また西洋を無条件でお手本として，その教えに帰依することを潔しとしない姿勢は両派に共通しており，政治の場においても，思想界においても，複雑で激烈なせめぎあいが演じられました。レジュメの参考文献のうち，下の方にある４点（注：方維規，李広柏，劉象愚，黄興濤の各論文）は，いずれも伝統的観念と西欧思潮との相関関係を論じたものです。そこで指摘されているように，近年でも，たとえば新儒学を提唱する人々の中には，西欧的「人文主義」が中国の伝統的思想には

とうにそなわっていた，という尊大かつ安易な主張が見られます。

しかしながら，洋務および変法自強の両運動が挫折したのち，たとえば梁啓超のような人は西欧の新思潮とひとつひとつ対峙しながら，伝統的な教養概念の読みなおしを図りました。そのようにして一歩一歩，苦闘しつつ進んできたのが，中国近代化の道のりだと思います。

○柴田　私への質問に，文字と声を区別するのではなく，両者の相互連関をテクストとしてとらえる方法はあるか，というものがありました。具体的には，朗唱されるクルーアン(コーラン)，状況の中で語られる説教などについての質問です。

メディア論の観点からすると，文字と声の関係は，必ずしも並行的な，あるいは同じレベルのものにはなりません。マクルーハンのメディア論の前提にはパラダイム論がありまして，声中心のパラダイムが，文字中心のパラダイムに変わったという捉え方をします。ですから，声の時代から文字の時代に移ると，声を使ったコミュニケーションはなくなりませんけれど，中心からずれたところに移行してしまう。この意味でのパラダイムをマクルーハンはギャラクシーと表現しました。メディアのパラダイムでは，ただ星が平板に並んでいるのではなく，星雲のように中心とまとまりを持っているのだと。メディアの間には，必然的に，どちらが中心に近いか，あるいは周辺かというような位階があると考えるわけです。

先ほどのホメロスの話に関連させると，文字がない時代には，当然，口承で知識を伝達していたので，その時代には口承に長けていることが最も重要なスキルになる。これに対して文字以降，口承の伝統やスキルは，どんどん廃れていってしまいました。音声言語というメディアが中心からどんどんずれていってしまって，もはや共同体の中で最も重要というわけではなくなってしまったのです。次の時代に存続していても，全体の配置関係の中で周辺に行ってしまう場合があるのです。結論を繰り返すと，文字と声の連関は，同レベルのものではあり得ないだろう，ということでございます。

○仲松　いただいた質問は，アナール学派自体の展開や変化の中で，現在

の世代が，いわゆるポストモダン的傾向と何らかのかかわりをもっているのかというものでした。

確かに，本日は，アナール学派については，初期の世代を中心にお話ししましたが，世代が変わってきており，同じアナール学派といっても，どこに問題関心の重点を置くかという点が違ってきています。報告でふれた 1970 年代から 80 年代にかけての時期というのは，ちょうどアナール学派の中でも世代交代の時期でした。ある意味ポストモダン的知的状況が生まれたからこそ，世代交代をしたといえるところもあるのですが，その中で生まれた世代が，いわゆる第 3 世代であり，さらにアメリカ的ポストモダンの色彩を強める第 4 世代です。本報告でもたびたび引用しましたロジェ・シャルチエは，第 4 世代の代表格といえるでしょう。シャルチエの発言などをみてもおわかりだと思いますが，大変ポストモダン的な問題設定をしています。まず一つ目には，その点から，アナール学派のポストモダン的な展開を指摘することができると思われます。

それから二つ目に，社会史から社会文化史へというかたちで，文化の中に社会をみるだけでなく，社会を文化としてとらえる，すなわち社会を文化的に構築されたものとしてとらえるといった新しい歴史の見方が出てきたという点です。以上の点からして，アナール学派は，ポストモダン的な影響を大きく受けながら，現在にいたるといえるでしょう。

現在のアナール学派は，また世代が変わっているところがありまして，第 5 世代と呼べる世代なのかもしれません。現在の『アナール』は，運営体制を大きく変えていまして，以前はほとんどフランス史の専門家で構成されていたのですが，新しい体制においては，フランス史以外の別の地域の歴史家を入れています。さらに，人類学者や社会学者などのような，ほかの領域の研究者も運営に関わっており，歴史学の雑誌というよりは，社会科学の雑誌というかたちをとり始めています。これが，学際的な研究への方向の模索や，これまでに研究対象となってこなかった地域の問題がとりあげられるなど，いい効果をもたらしている面もあると考えられるのですが，本日の報告でとりあげた「歴史学の危機」というものに対して，は

たして『アナール』が対応できているかというと，不十分な状況にあると思います。雑誌の『アナール』自体が，発行部数を減らして，若い世代は『アナール』を読まなくなっており，『アナール』の求心力そのものが低下しているという状況です。問題がアナール学派だけの問題で，歴史学自体にはまだ興味がもたれていればよいのですが，フランスにおける歴史学への関心は，低下しているといっていいでしょう。

○司会　ありがとうございます。この全体討議のどこかで安酸先生にこの４名の先生の発表についてコメントがあればお聞きしようと思ったのですが。

○安酸　『人文学概論』は，もともと１年生対象の概論講義のテクストとして構想したものです。ワン・セメスターは15回の授業ですので，90分授業を15回するという形で考えたわけです。当初は，今のようなちゃんとした本を考えたわけではありませんでした。しかし途中で東京の出版社から全国で売れるものにしてはというアドバイスがあり，本学の人文学部の学生だけじゃなく，全国の人文学を学ぶ学徒が読めるようなものにしたわけです。もちろん自分でも足りないところは幾らでもあると思っています。進化論がないとおっしゃいましたが，もちろんそういうことも考えないわけではないですよね。でもマルクスもなければフロイトもないと，そういうことを言い出したらきりがないわけです。

　でも，一学期15回の授業で何を語るか。私としては，やはり今の人文学が置かれている状況，それからどこから現状が生じてきたかという，ある程度の歴史的考察を６ぐらいで語って，残りの部分を人文学の実践に関して自分の視点から叙述することにしました。ですから当然，哲・史・文のあらゆることを全部カバーすることは，所詮できないことなのです。それから，わが国では文化人類学と言っていますけれども，英語ではカルチュラル・アンソロポロジー，つまり人間学の一種なのです。人間学には一般的に三種類あって，自然的人間学，哲学的人間学，そして文化的人間学(文化人類学)です。私は九州のある大学で哲学的人間学の非常勤講師を10年ほど勤めましたが，日本では文化人類学と表記する関係からか，わが国の

文化人類学者は他の種類のアンソロポロジー，とりわけ哲学的人間学に冷淡というか，そもそも人間学を全体として捉える視点が乏しいように思っています。

それはともあれ，私は人文学の暫定的な定義として，人間とその社会を対象とする学問だというふうに規定しました。でもこれだと，人間学と変わらないですよね。人間学だって，そういう定義に入ります。だから，いわゆる人間学と人文学はどう違うのか，という問題が出てきます。それからもう一つ，人文学と人文科学の区別も重要です。私はこの二つのものは区別されるべきであると考えています。人文学は古代ギリシアのパイデイア，それを受け継ぐ古代ローマのフマニタス，そしてそこから生い立ってきた西欧のリベラル・アーツ（自由学芸）の伝統に深く棹さしています。これに対して，われわれが人文科学と言っているものは，おそらく18世紀後半以降，本来の人文学から自然科学や社会科学が独立していって，いわばもう残りかすみたいになった人文学が，自らもそれなりの科学であるとして，自己の科学性を主張するなかから成立したものです。われわれは人文学部と名乗っていますが，この学部に所属するほぼ全員の教員は，人文学的ではなく人文科学的な思考になっています。

今日の話は大変勉強になりました。ただ，やはりわれわれはそれぞれの分野の専門家なので，どうしても専門的に考えます。だけれども，皆さんが人文学概論という形で語るのであれば，何を語るべきかいうことなのです。何を語らなければならないかと考えてみると，やはり専門化・個別化していった個々の学問ではなくて，トータルな人文学について語る必要があるわけです。少なくとも西欧において成立した人文学は，中心にフマニタスという概念があって，人間形成に資する根幹的な学問であったわけです。それが教養の問題と不可分なのも，この人間形成ということと深く結びついています。やはり人間形成，フマニタスに資する学問だという点を見落としてしまうと，人文学は単なる人間学や人文科学と変わるところがなくなってしまいます。人文学は科学つまりサイエンスではなく，もともとは広義のラーニングです。このあたりのことが，なぜ進化論が入ってこ

ないかということにも関係しています。進化論以外にも，欠けているものはいろいろありますが，やはり15回で何を語らないといけないかを考えると，おのずからテーマを絞り込むしかないのです。例えば古典ということを，私は仕方なしにあのような形ではめ込みましたけれども，本当は1章を設けたかったわけです。けれどもそれをやってしまうと，あれもこれもとなって収拾がつかなくなる。自分としては，文学についてほとんど論じなかったことが，本書の重大な欠陥だと思っていますが，限られたスペースでこのテーマを扱うことは無理ですね。今日のお話を伺って改めて自分でもよくこんな本を書いたなと思うのですが，実際，人文学概論なんていう本は書けないですよ，一人では……。自分で言うのも変ですが，これは蛮勇をふるった力業以外の何物でもないですね。

ごく最近，『人文知』という本が東京大学出版会から三巻本で刊行されています。東大の文学部が総力を挙げて人文知について論じているという触れ込みだったので，期待して読んでみましたが，結局寄せ集めなのです。専門的な学問的な視点から，個々の研究者が言っていることを集めてみても，それは人文学にはならないのではないかという気が私はしています。人文学というのは，やはり人間性に照準を合わせたトータルな学であって，すぐれた意味での「総合学」でなければならないと思うのです。

現在，日本の大学に50ほど人文学部がありますが，われわれは人文学について実はあまりよく考えてこなかったのだと思うのです。そういう意味では，今回上梓した『人文学概論』はそれなりの意義をもっていると考えています。私自身はヨーロッパを専門的に研究していますので，自分の視点から書くとなると西洋中心の人文学の叙述にならざるを得なかったわけですが，例えばイスラームやっている人はイスラームのところで考えればいいと思うのです。当然中国にはそういう伝統がありますから，東洋的な意味の人文学というものをぜひ考えて，そういう本が書かれるべきだろうと思うのですね。

結局，私自身も人文学についてはディレッタントなのです。私の専門はキリスト教学ですから，そこをベースにして書くとなったら，イスラーム

は入ってこない，東洋が落ちている，あれもないと言われると，実際その通りなのです。でも，もしあなたが書くとしたら，どう書きますかという問題だって，そこはやはり考えていかないと，人文学なんていうのは，結局それぞれは専門家を越えないと，そういうものは出てこないのではないかと私は思っています。

○司会　ありがとうございました。このテクストを単独で書かれたことのいろいろな意味とか条件とかについて，テクスト以外の本音をお聞きすることができました。

柴田先生に，コンテクストの主題化ということについてお聞きしたいのですが。コンテクストと言うと，テクストが主役でコントクストは背景かなという気がしたの，もうちょっと詳しくご説明していただけませんか。

○柴田　簡単に言うと，例えば詩的な効果があるテクストは，そのコンテクストが如何なるものかを明らかにしつつ，それ自体が次のテクストのコンテクストになります。この点をメディア論に引きつけて言えば，例えば，プラトンを解釈するとき，そのコンテクストにはメディア環境があることを考えなければならない。そうしないと，どうしてプラトンの全体の思想の中に，テクストなるものに対する両義的な態度が見られるかを説明できない。

それから，さっきの話と関連させますと，ホメロス研究は長らく作者探しをやっていたそうですね。ホメロスの本を読むと，エピソードの間に一貫性がない，いろいろな方言や，いろいろな時代の言葉が出てくる。しかも，我々にとっては非常に長く感じるフレーズが多い。これは一体なぜかと。おそらく違う人がたくさんよってたかって作品を書いてきたのだろう，と研究者たちは考えたようです。だから，ここは誰の作，誰の作というような研究をずっとしてきたそうです。まさに自分たちが文字という時代のコンテクストにいることを自覚できない状況の典型です。これに対してミルマン・パリーは，われわれは文字の時代の人間である，だから文字の時代の人間が声の時代につくられ，あるいはその時代を象徴するホメロスの英雄詞を自分たちの文字の時代のコンテクストに引きつけて読んでしまっ

ているが，それではだめだ，と言った。全く違うコンテクストがあったという認識から始めなければならないのだと。ホメロスの詩でエピソードの間に一貫性が見られないのはなぜか。それは，口承時代のホメロスの詩が，この会場でお話しするように，状況によって話を長くしたり，エピソード入れかえたりして歌われたからです。だから，文字に起こしてみて検証してみると一貫性がなくても不思議ではない。読者ではなく，その場で聴いていた人にとって，最もよい伝達の仕方だったわけです。

それから，いろいろな方言があったり，いろいろな時代の言葉があっても，口承の時代ならなんら不思議ではない。そもそもホメロスのような詩人は文字に書かれたものを覚えるのではない。師匠から口伝えで詩を教わりました。歌い継がれてきたものを反省することなくそのまま覚えました。だから歌には，何世代にもわたっていろいろな地域から寄せ集めた要素を含むことになる。

文字の時代の人間にとって一節が長いというのも不思議ではありません。この長さは，口承で覚える場合に最も適した長さであって，絶対的に長いとか短いとかいう基準は存在しない。

このようにコンテクストを捨象すると読めない本というのは幾らでもあります。厳密に言えば，全てのテクストに言えることです。だからテクストのみが主役だという前提自体が，テクストをコンテクストと切り離して考え始めた特定の時代の発想なのではないかと思うわけです。

コンテクストを思考しないでテクストを読むというのは厳密には不可能です。テクスト同様，コンテクストも主題化しなければならない。コンテクストを図化させることを念頭にテクストを読むという意味で，両者に対して主題化という言葉を使ったわけです。

○司会　わかりました。あと10分ぐらいですけれども，フロアのほうからも，もし質問があればよろしくお願いします。

○安酸　私が土屋先生から質問していただいて，なるほどと思ったのは，やはりメディア研究の枠組みというのは，かなり西洋中心ではあるのですよ。だから西洋の歴史をベースにした場合のパラダイムが全ての文献に当

てはまるのではないだろうということは確かに言えると思います。全く違う形の声と文字の連関というのも，恐らくお話として念頭に置かなければいけないのではないか，これはもう大変勉強になりました。私もこの分野全然知らなかったものですから。

○土屋（土屋博氏，元北海学園大学教授）　安酸先生が説明してくださったこととの連関で，先ほどの４人の方々の問題とつなげて考えると，やはり進化論の問題とイスラームの問題というのは，実は個別領域の問題じゃないと私はいつも思っているのです。例えば進化論の問題と，安酸先生の本の中で，呪術と宗教の問題が出てくるのですね。一番最初に言ったのはフレーザーで，今日から見ると完全に進化論的な考え方を無意識のうちに前提にして呪術，宗教へ向かって進化する。そして，しかしその後で人類学やなんかの影響もあるのですけれども，マジコ・レリジャスという概念が出てきた。そのことによって，呪術と宗教を全く別ものであるというふうに考えなくなった。これは何も近代人特有の変更した見方じゃないんですね。安酸さんが書いておられる。ですから呪術と宗教を連続的にとらえるというのは，実はかなり大事な問題で，これとやはり無意識のうちに進化論的な発想法というのは絡んでくるというところをちょっと理解していただければと思います。

それからもう一つイスラームの問題ですけれども，これは安酸先生の本で宗教の定義の話が出てくる。この宗教の定義というのは，1960 年代から国際的な学会では，大議論になったのですね。宗教概念の再検討で問題になるのが，やはりイスラームなんです。明らかに従来の宗教概念に対して疑問を唱えるのであれば，これを考えることは，かなり根本的な問題じゃないかと。

○司会　何となくイスラームと言われると，西洋文化を相対化するだけということで考えてしまいますけれども，手塚先生の発表もそうでしたけれども，歴史や文化をきちっととらえるというのは重要だなというふうに土屋先生の話を聞いて思いました。

最後にさっきの安酸先生の話にちょっと戻りますけれども，僕は教養部

にずっといて，その後経済学部に一時いたのですが，ある先生が教養部から来た教員に教養ゼミを任せればいいと発言した時に，教養を専門にしている人はいないんだと教養部出身の人が言っていました。恐らく人文学についても，専門家はいないけれども，どこか自分の人文学的な専門からそれを汎用的に使えるような人文学概論的なテクストみたいなものを考えることができるかなと思います。今回の人文学概論というテクストをお書きになった安酸先生もいろいろな制約があったとおっしゃるとおりですが，それに対して人文学部の中国文学・フランス史・メディア論・文化人類学の先生たちの発表というのは，素人の自分が司会できないぐらいそれぞれの分野について深いきちっとしたものだと思います。

最後になりますけれども，そのパネリストの4人の先生たちがテクストを提供してくださった安酸先生に感謝したいと思います。そしてこの会に参加してくださって長い間聴講してくださり，意見を言ってくださった方たちにも，お礼を申し上げたいと思います。

これで第2回の人文学会を終了したいと思います。ありがとうございました。(拍手)

(文責：本城誠二)